The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジョージ・エリオットのヘロイン達 : ロモラ、ドロシア、グエンドレン(I)
Author(s)	木村, 成子
Citation	Osaka Literary Review. 1975, 14, p. 40-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25646
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジョージ・エリオットのヘロイン達：ロモラ、ドロシア、グエンドレン（I）

木　村　成　子

作家は、作品をいくつ書こうとも、きわめて広い意味に於て、同じ本しか書かないと言われる。作家活動を続けるうちに、その文学的信条は多少変化しても、moralityへの求道者としての態度を終生崩すことのなかったG. Eliot には殊にその傾向が顕著に感じられる。即ち、習作である*Scenes of Clerical Life*から最後の *Daniel Deronda* に至る主要作品に於て、彼女が一貫して追求したのは、同じ系列に属する人物＝同一人物による moral evolution という同一主題であり、Janet (*Scenes of Clerical Life*), Adam (*Adam Bede*), Maggie (*The Mill on the Floss*), Silas (*Silas Marner*), Romola(*Romola*), Felix と Esther (*Felix Holt, the Radical*), Dorothea (*Middlemarch*), Gwendolen (*Daniel Deronda*) という若い主人公達の無知から精神成長へという発達がいつも描かれてきた。このような点を考えると、G·Eliot の作品はその主題が「人生の門出に立つ若い主人公が種々の試練による精神成長を経て自己確立に至る」[1] という精神発達過程を追う点で、*Bildungsroman* 的特徴をもっている。ところで *Bildungsroman* とは主題として、主人公の人間形成を扱うのみならず、本来、読者の *Bildung* という啓蒙をも意図したといわれている。[2] G·Eliot も文芸作品を一つの appeal として読者に呼びかけることを作家の任務と考え、小説を自己の思想表現のvehicleとみなしており、Religion of Humanityに代表される彼女の思想体系の追求を、実人生の中に探索しその具体的な模様を小説として具現するという形で完成している。このように主題に於て、又、読者の啓蒙という目的意識に於て、G·Eliotの作品は *Bildungsroman* の系列に属するものと考えられる。

こうして生涯を通じて、作品の背後にある作者の関心方向は基本的に一

つと言える。とりわけ、後期の作品に入ると各作品間の類似は、前期の漠とした類似から、より固定されより凝縮された類似へと発展している。即ち *Romola, Middlemarch, Daniel Deronda* には heroine 中心に考察した場合、主題のみならず、主題の主体となる heroine 、そして彼女をとり巻く状況設定に於て、かなり酷似した表現がくり返し流れているという感が強い。小論ではこういう同一表現を、①主題、② heroine 像、③ heroine をとり囲む人間関係の三点から考えると同時に、同じ表現に執着しがちであった G·Eliot の作家としての特徴を考察したい。

① 主題に於て

夫々の heroine, Romola, Dorothea, Gwendolen の生きた世界は15世紀 Florence、1830年前後（1829～32）の英国中都市、19世紀後半Europe各地と舞台は異なるけれども、彼女達のtype、そして夫々が生きた生涯は酷似している。即ち、美しく利発で大胆な少女が aspiration追求の結果、誤った結婚を選択し破局を迎えるが、不幸な結婚の試練を通して、自己を捨て他者に生きるというより広い認識への開眼を一様に経験している。このように三作の主題は、苦しみを通して moral enlargement に至る過程という heroine の *Bildung* を扱うものである。ところで *Bildung*とは、自己を確立する人格形成の意味であり、自己と外界との正しい関係に目ざめ、両者の調和を得ることである。Paris は、自己と外界との対応関係の様相を次の三つに大別している。

> (1) self relates to the outer world egoistically (or subjectively) …in this stage, self is seen as the center of the world and the world as an extension of self.
> (2) self is overwhelmed and threatend with annihilation by the hard reality of the outer world: it then experiences a state of disillusionment or disenchantment…
> (3) self relates to the world objectively, giving up ego-centricity, seeing the outer world as an autonomous existence of which it is a part.(3)

人間はこの(1)→(3)への経過を歩むことによって精神成長を遂げるといえる。

stage (1)のegoisticな人間が、 stage (2) で suffering を経験し、 stage (3)で他者の集合である社会や人類の一員としての自己を認識出来るのだ。

三人の heroine の *Bildung* を見ていった場合、例外なく(1)→(2)を順次経過して、最後に(3)で、 G. Eliot の理想とする altruismの境地に至っているのがわかる。つまり年若い heroine 達は結婚前、夫々 egoistic であったことがかなり詳しく述べられている。人間離れした崇高な Romolaにすら、父と二人切りの生活から生じる外界への冷たい敵視と父親のみへの視野の狭い愛情が見られるし、Dorothea にも、貧民救済計画に没頭するあまり、自分の活動のために貧しい人々がいる方が望ましいと秘かに思う egoism がある。Gwendolen に至っては、 'a perfect picture of youthfulness, its vanity and silliness, its sense of its own absoluteness'(4) が感じられる。即ち、主として若さからくる精神的未熟さのため、彼女達の外界への態度は、明らかに self-centered なものであり、 subjective な思考態度が一様に見られる。このように(1)を振り出しに実人生へ出発した heroine 達は、当然厳しい現実の試練を受けることになるが、彼女達の場合、'hard reality of the world' は三人共、不幸な結婚の試練という形で表現される。そして三人共、結婚前に抱いていた aspiration の実現の挫折と深い damage を経験する。しかし、この stage (2)の試練こそ、heroine 達にとって精神成長に至るための必須条件であり、この苦悩の過程なしには到底 *Bildung* を完成出来なかったであろう。 G. Eliotの *Daniel Deronda* をヒントにして創作したといわれる H. James の*The Portrait of a Lady*に於て、Ralph が Isabel に語るセリフは、開眼には試練が必須であることを端的に物語っている。

> "...It has never been seen by a young, happy, innocent person like you. You must have suffered fist, have suffered greatly, have gained some miserable knowledge. In that way your eyes are opened to it..."(5)

このような意味で heroine 達にとって結婚の試練の意義は大きい。

こうして三人は試練を通して成長を遂げるが、以下は開眼の際の各 heroine の心境を最も強烈にとらえた箇所である。

> It is only a poor sort of happiness that could ever come by caring very much about our own narrow pleasures. We can only have the highest happiness, such as goes along a great man, by having wide thoughts, and much feeling for the rest of the world as well as ourselves;...(6)

> Far off in the bending sky was the pearly light; and she felt the largeness of the world and the manifold wakings of men to labour and endurance. She was a part of that involuntary, palpitating life, and could neither look out on it from her luxurious shelter as a mere spectator, nor hide her eyes in selfish complaining.(7)

> That was the sort of crisis which was at this moment beginning in Gwendolen's small life; she was for the first time feeling the pressure of a vast mysterious movement, for the first time being dislodged from her supremacy in her own world, and getting a sense that her horizon was but a dipping onward of an existence with which her own was revolving.(8)

彼女達はここで、自己中心性を完全に離れ、自己を社会の一員として見る客観的な視点をもつことが可能になっている。自己と外界の正しい認識にめざめたという点で、三人は立派に *Bildung* を完成しているが、この引用は同時に、「人類愛」への積極的な唱道をも明らかに示している。三人の達した境地は、自己を超越した広大な世界であり、狭量な自己に対して総体である人類の絶対的な偉大さであり、 Live for Others の尊さである。ここで、 G.Eliot の altruism は、 A.Comte が最終的に到達した social love、Religion of Humanity と一致する。

G.Eliot の生きた当時は、所謂 'the disappearance of God'(9) の時代であり、人々はその風潮に種々の反応を示す。例えば、 Tennyson はその風潮に逆行して更に強く God にすがろうとしたし、或いは Mallarmé, Nietzsche, Conrad 等は nihilism へと傾いていったが、そういう諸々の傾向の中にあって、G.Eliot は God に代って人間を救い結び合うものと

して Humanism への信仰 (Religion of Humanity)を強く打ちたてた。heroine 達の *Bildung* の最終段階が常に Love of Humanity に結びつくことを考える時、G.Eliot が、真に価値ある境地として、如何に深く Humanism を認めていたかが感じられる。人間が苦悩の試練を通して寛い人類愛に開眼する process が、G.Eliot にとって、常に追求の中心であり、その発展過程に焦点を合せるため、heroine の精神的歩みという *Bildungsroman* の形態をとったと考えられる。このように三作の同一主題は、単に heroine の *Bildung* を扱うにとどまらず、程度の差はあれ、彼女の思想体系の具現と、読者の啓蒙という目的に貢献するよう意図されているように思える。このように G.Eliot の文学は、一方で倫理的自己の形成という強い内省的な姿勢をもつと同時に、広く他者→人類という社会的外向的な視野をももっている。

② heroine 像に於て

それでは、*Bildung* の主体である heroine 達は、どのような type であり、どのような世界に住んでいたのだろうか。人並はずれて美しく、才知にたけた彼女達は、人間的にも女性としても卓越した存在である。彼女達の中心的特性として先づ挙げられるのは、moral integrity である。彼女達には、葛藤、迷い、挫折を経験しながらも、ひたすら、より高きもの、より広きものに近づこうとする熱烈な意志がある。聖女のような Romola、或いは、「自分の生涯を何か偉大なものに献げたい」と熱望する Dorothea は言うまでもなく、三人の中では最も idealize されることなく現世的 context の中で追求され、一見 ego の固まりのように見える Gwendolen ですら、彼女の基本的な特性は、低俗や悪を本能的に嫌う高潔さである。

> Whatever was accepted as consistent with being a lady she had no scruple about; but from the dim region of what was called disgraceful, wrong, guilty, she shrank with mingled pride and terror;...(10)

では彼女達の世界はどのようなものであったのだろうか。三人の世界の

共通項をひろっていくと、先づ三人共かなりの水準の教育、教養を身につけていることがわかる。学者の父との没俗世的な生活そのものが、立派な教養の環境となっている Romola の場合、女を頭から軽蔑する父親ですら、次のように彼女の教養を高くかっている。

> "... And even in learning thou art not, according to thy measure, contemptible....But as Calcondila bore testimony, when he aided me to teach thee, thou hast a ready apprehension, and even a wide-glancing intelligence. And thou hast a man's nobility of soul:...(11)

Dorothea の教育に関して、作者は比較的 ironicalである。12才の時より家を離れ、英国或いはスイスの家庭で受けた教育は "on plans at once narrow and promiscuous"(12) なものであると批判する。けれども Pascal の *Pensées* を暗誦し、Jeremy Taylor、Herodotus、Keble の *Christian Year* を愛読する彼女は思索家であり、当時としてはかなり高度の知的教育を受けたと言える。Gwendolen はといえば、頭脳明晰な彼女の受けた教育が立派なものであり、特に若い lady のたしなみとしてのフランス語と音楽にかけては相当の自信をもっていたことが描かれる。このように彼女達のintelligence は夫々の時代背景から見た場合、賞讃すべき水準のものであった。しかしそれはあくまで書物上の知識であり、現実とかけ離れた知識であった。そしてそれは多く彼女達の育った環境のせいであった。

それで次に彼女達の環境を比較すると、三人共共通して、外界から魂を孤立させるような環境に育ったことが考えられる。Romola は、かっては名家であった Bardo 家の没落後、不正な世間への不満で、自分の世界に閉じこもる父親との排他的な生活をしており、幼い頃から必然的に proud self-dependence をもち、外界に対し "snowy embankment" を築いてしまうのだ。Dorothea の場合も、幼くして両親に死別して以後、故郷から離れて教育を受け、 Middlemarch に帰って以後も "the intolerable narrowness and the purblind conscience of the society around her"(13)

への嫌悪から Middlemarch の社交界を寄せつけない。G.Eliot は又、native land が人間にとって如何に意義あるものかを述べて、幼少の頃から保養地を転々とした Gwendolen に native land というべきもののないことの不幸を書いている。

> Pity that Offendene was not the home of Miss Harleth's childhood, or endeared to her by family memories! A human life, I think, should be well rooted in some spot of a native land, where it may get the love of tender kinship for the face of earth, for the labours men go forth to, for the sounds and accents that haunt it, for whatever will give that early home a familiar unmistakable difference amidst the future widening of knowledge: a spot where the definiteness of early memories may be inwrought with affection, and kindly acquaintance with all neighbours, even to the dogs and donkeys, may spread not by sentimental efforts and reflection, but as a sweet habit of the blood.(14)

Paris は人と community 或いは、人と伝統との tie は大きな集合に於ける一員としての個人の立場を認識させるという点、即ち自己と外界との正当な関係に目ざめさせるという点で必須のものであると主張している。三人が夫々、父のみ、両親なし、母のみという淋しい家庭に育っていることも共通点である。このような接触すべき外界の不在、親の不在は、彼女達を isolation へ追いこむと同時に、現実に根ざさない aspiration へと駆り立てている。

> She had been brought up in learned seclusion from the interests of actual life, and had been accustomed to think of heroic deeds and great principles as something antithetic to the vulgar precept, of the Pryx and Forum as something more worthy of attention than the councils of living Florentine men. ...(15)

上記の Romola の場合に典型的に見られるように、環境のせいで現状を vulgarなものとし、それへの反発から現実を離れた崇高なものを憧憬する

気持が heroine 達には強い。

ところで、B. Hardy は、 G. Eliot の heroine が共通して苦しむ源として "*ex officio* disability of being a woman" [16] に着目し、これこそ彼女達の aspiration 追求に handicap を与えたものと主張している。G. Eliot の作品に於て、この女性故の悲劇は度々言われることである。しかし後期の heroine 達を survey する時、彼女達の悲劇は性の悲劇、特にある特定の時代精神を反映するような質の女性個有の悲劇ではないように思われる。 F. R. Leavis に指摘されたように、 G. Eliot の小説家としての偉大さの一つは、巾広く深いbackgroundの描写のもとにcharacterを分析したこと——つまり人生に立脚した個人の世界を扱ったことである。三作共、 organic human society の精細な描写があり、その中で heroine 達は *Bildung* を経ていくが、彼女達の苦悩と試練は、そういう background を超越した永久不変の苦悩を物語るように思われる。例えば、彼女達の悲劇は、当時の不当に抑圧され束縛された女性の悲劇では決してない。それどころか、三人は現代女性にも匹敵する程の自由に恵まれている。彼女達の悲劇が、結婚という形で展開する為、性の悲劇と思われがちだが、結婚後も Florence の貧民救済に活発な活動をする Romolaをはじめ、彼女達の生きる場は、家庭を超えた広さをもち、その意味で性の拘束は感じられない。

三人共、精神的にも経済的にもかなり豊かで自由な空気の中で育ち、ひいては結婚の選択も全く自分の自由意志で行っている。特に Dorothea の場合、年700ポンドの遺産収入と、 "I shall never interfere against your wishes. People should have their own way in marriage." [17] とか、"...you had more of your own opinion than most girls. You shall do as you like." [18] と言って寛大に Dorothea の生き方を尊重する叔父に恵まれている。ただ Gwendolen の場合 G. Eliot は他の二人に見られなかった突然彼女の一家を襲った破産を設置して、経済的圧迫が気の進まぬ彼女を強制的に Grandcourt との結婚に追いやったかのような印象を与えている。しかし G. Eliot のその辺りの書き方は、微妙に巧みであ

り Gwendolen の結婚にはあくまで彼女の意志が明確に働いていたことも記されている。以下の引用はまさに求婚を承諾する寸前の Gwendolen の心理状態である。

> ...She seemed to herself to be, after all, only drifted towards the tremendous decision:... but drifting depends on something besides the currents, when the sails have been set beforehand. (19)

この引用は、この章の chapter motto である "Desire has trimmed the sails, and Circumstance/ Brings but the breeze to fill them"(20) とあわせて考えるべきである。current とは決意へと促がす外的な要因（この場合は経済的圧迫）であり、 sails が決意へと自発的に動こうとする Gwendolen の意志であることは言うまでもない。Gwendolen の場合、外的要因よりも内からの desire こそはるかに大きな要因であったことがわかる。

結婚に際して heroine 達は三者共、周囲の反対とか、嫌がらせといった障害を受けるが、皆それをものともせず意志をおし通している。このように、 G. Eliot が heroine 達に、自由意志と主体性、意志の実現可能な環境を与えているのに注目したい。というのは彼女達の悲劇は、結婚の悲劇として表わされるが、それは偏に自らの選択の誤りによるものであり、環境や運命 etc の他からの圧力によるものではないという点で、G. Eliot は heroine に厳格な道徳的責任を負わせているからである。強いられた上での選択の責任よりも、自由意志による選択の責任の方が、行為に対する道徳的責任のもつ意味は大きいからだ。G. Eliot が heroine 達に男性にも匹敵する程の自由を与えたのは、このためではないだろうか。彼女にとってより意義をもつのは、性を超えた人間の内部であったように思われる。このように G. Eliot が描く悲劇は、被害者意識的な虐げられた女性の悲劇でではない。性の悲劇を超えた倫理的存在としての人間の悲劇こそ、彼女達の悲劇の中心テーマである。だからと言って、三作に女性に対する時代の圧迫の描写がないわけではない。G. Eliot が生きたVictoria 朝

はその意味では、女にとって厳しい時代であったと思われる。以下は Daniel の母親が Daniel に言う言葉である。

> "... You are not a woman. You may try ... but you can never imagine what it is to suffer the slavery of being a girl. To have a pattern cut out... 'this is the Jewish woman; this is what you must be; this is what you are wanted for; a woman's heart must be of such a size and no larger, else it must be pressed small, like Chinese feet;(21)

このように女性固有の悲劇は、彼女の作品にも明らかに存在するが、G. Eliotが三作で追求するのは、女を超えた倫理的存在としての人間である。以上挙げてきたように、heroine 達は夫々独自の時代を背景にしながらも、彼女達の背負った悲劇は時代を超越するものである。限定された特定の時代、制度のもたらす悲劇ではなく、もっと深く人間倫理の根底に触れた永遠の悲劇である故に、彼女達の生き方は現在もなお我々読者をとらえることが出来ている。

以上述べた彼女達の共通点を要約してみよう。何かより高いものを追求してやまない moral integrity、輝かしい知性、けれども心の内の理想と現実との conflict に悩む姿（duties と ideals との conflict に悩み、その調和点を見つけようと努力する姿）、――こう考えてくると、この共通する特質は、G. Eliot 自身にもあてはまるようである。事実、彼女も16才で母と死別し、家を離れて寄宿舎に入っており、長じてから父の死ぬ29才迄は家に閉じこもった淋しい生活を経験している。そういう彼女の経歴、或いは素晴しい知性、徳性への憧れをふり返る時、3人の heroine は彼女の alter ego の投影のように思える面が確かにある。V. Woolf は、heroine 達、並びにその story は "the incomplete version of the story of George Eliot herself .."(22) と言っているが、彼女と heroine 達との類似関係は、しばしば言われてきた。特にDorotheaは、夫 G. H. Lewes も "She is more like her creator than anyone else and more than

any other of her creations" と言うように、G. Eliot と重なる点が多いようである。作家は作品にしか自己表現出来ないのだから、作品に自伝の要素がある程度含まれるのも当然であろうし、就中、*Bildungsroman* は作者の自伝的要素が濃いことはしばしば言われている。こういう見地からも、heroine 達は、G. Eliot の分身といえるかもしれない。C. Bedient は "unexamined guilt of an unmarried 'Victorian' wife"[23] が、彼女の創作の推進力となっているとし、彼女の罪の意識を、創作の根本動機や morality への偏執の傾向と結びつけて考えている。heroine と author の関係について、heroine = author という断定は下せないけれども、何度も同一表現のくり返される前提には、heroine は単なる想像のみから生れたものとは思われず、G. Eliot 自身の具体的な体験、或いは体験から生れた心情と全く無関係とは言い切れないのではないだろうか。実人生との conflict に悩みながらも、卑俗なものに染まることなく、逐に高きもの、広きものに到達する heroine の姿は、G. Eliot 自身の alter ego の投影でもあり、かくありたかった姿——彼女の道徳意識が作り上げた姿——でもある。

③ heroine をとり囲む人間関係に於て

次に三作の類似は、heroine を取り巻き、彼女に重要な影響を与え、成長への大きなひきがねとなる役割をもつ登場人物群の pattern に於ても見られる。登張氏は *Bildungsroman* の pattern を、「主人公の人間形成という一本の糸に他の人物が吸収されていく形」[24] と述べている。主人公は試練を経ることによって、*Bildung* を逐げるが、そういう試練は主として人間関係による試練、即ち、良きにつけ悪しきにつけ、彼女をとり囲む人物とのかかわり合いを通して逐げられるので、*Bildungsroman* に於ては、人物関係こそ見落すことの出来ない必須の pattern なのだ。*Bildung* とは常に積極的に存在の価値獲得へと向う形成の歩みであることがその基本概念となっているが、それには正と負の方向に働く二つの形成要素がある。つまり人物群による影響は、いつも決して良い影響を与える

プラスの存在ばかりではなく、時には挫折へと導くマイナスの存在である場合も多い。この人間関係に於ける三作の類似は、heroine をめぐって彼女の精神発達に寄与する形成要素として、常に三人の人物が存在すること、そして heroine の *Bildung* に対する彼等の正、負の役割関係がいづれの場合も共通して同一であることだ。

即ち heroine を理解し *Bildung* へと導く正の形成要素として、Savonarola, W. Ladislaw, D. Deronda が存在する。彼等は heroione が不幸な結婚に悩む時、狭さから脱け出し、広きものに目ざめるようにと常に説く。

> "Look on other lives besides your own. See what their troubles are, and how they are borne. Try to care about something in this vast world besides the gratification of small selfish desires. Try to care for what is best in thought and action —something that is good apart from the accidents of your own lot"(25)

彼等は Paris の言う heroine より一まわり優れた崇高な人物であり、苦悩する heroine を救うという人間による人間の救済が可能な人物となっている。尚、悩める heroine を開眼へ導く立場上、彼等には priest, angel, 光、spiritual refreshment の image がくり返される。名実共に僧侶である Savonarola は言う迄もなく、彼等は heroine 達に愛と同情をもつだけでなく、人間としての誤りを厳しく説き裁く存在でもあるからだ。

それに対してnegative な方向に働く形成要素として、夫、夫の mistress が存在する。普通、*Bildungsroman* では、主人公の *Bildung* に於て、主人公と「あるものとの対決」が必須の行程となっている。主人公があるものを否定し、のり越えることによって、何かを獲得し、学び、成長を逐げているのだ。三人の場合も、「夫との対決」のもつ意義は大きい。Titoは別としても、Casaubon と Grandcourt は善意に燃えるみずみずしい heroine 達に対して、枯渇してしまった人柄を表わすdrynessの類似する image で統一されている。夫は heroine 達の aspiration をことごとく挫折してしまうという点で、負の形成要素であるが、heroine 達は窮極的

には試練を踏み台にして、より広い視野に開眼するという正の価値に試練を転じることに成功している。こうしてheroine 達が最終的には開眼を完成し、倫理的存在として成功を収めたのに反し、heroine と対決する夫は全て死に、この世から消失するという対照的な判定を下されている。

次に、夫の unmarried wife しての女性、 Tessa, Rosamond, Mrs.Glasher であるが、彼女達が、heroine の *Bildung* に与えた影響は非常に大である。もっとも三者のうち Rosamond は Casaubon の mistress ではないが、第二の夫 Will とのかかわりあいに於て、他の二つの場合同様、heroineに大きく影響を与える人物である。彼女達とheroine とのかかわり合い方は三作夫々異なるけれども、その接触は heroine を個人を離れた広きものへと視点を転じさせた一つの踏み台となっている。

以上、三つの観点から三作に共通する同一表現を見てきたが、この三点はいわば作品の土台ともなるべきものである。つまり非常に大雑把に言って、 G. Eliot の興味の中心は三作に於ては不変のように思われる。三作の成立事情、或いは発想を見ていくと、三作とも全くまちまちである。*Romola* は1860年、たまたま旅行で Florence に滞在中、その歴史に満ちた町に啓発をうけ、historical romanceとしての構想を得ている。*Middlemarch*は最初は現在のような plural plot ではなく、*Miss Brooke* なるDorothea一人を中心とした storyを考えていた。又、*Daniel Deronda* は1872年秋、ドイツを旅行中、 Humburg の賭博場で賭博に熱中する若い女性を見て、彼女に対する感慨から、冒頭のあの印象的な賭博をする Gwendolen の scene が生れている。このように plot から発生したもの、或いは、character から発生したものと、その発想には差があっても、結果的には常に同じ表現に落ち着くという事実には、全ゆるものを自らの根本的な価値観に結びつけてしまう作者の強い傾向がいつの場合にも感じられる。heroine 像や主題が、 A. Comte の説く Religion of Humanity と結びついていることは言う迄もなく、「全ての事物は夫々歴史をもつ」と言って、諸事物を、過去、現在、未来と連なる時間的秩序によって観察

する Comte の歴史的思考方法は、何年間かに渡る heroine の人間形成の中に見られるし、Comte の課題であった社会有機体説の意識は、社会の巾広い背景の中で種々の人々と複雑にからみ合う関連をもって生きる heroine の描写に現われている。このように Positivism に基づく道徳意識が、如何に強く彼女を支配していたかを感じざるを得ないが、それは良い意味でも悪い意味でも彼女を特長ある作家としている。即ち、その熱烈な道徳意識があってこそ、F. R. Leavis も指摘するとおり、彼女は英国小説の偉大な伝統の要に立つ作家になり得たが、同時に Positivism 自体のもつ狭さ、限界が彼女の芸術にもある制限をもたらせてしまっている。G. Eliot の名声が没後衰え全く顧みられなかった最たる理由は、人生の全てを law で規定しようとする実証主義的価値観の狭さによるものであろう。今日、Positivism は19世紀半ばを一時期飾った思想として、ほとんど忘れられた存在である。しかし Positivism そのものの薄命に対し、それを具現した G. Eliot の小説が夫々の作品の評価の差はあれ、F. R. Leavis 以降再評価され、今なお我々の心をとらえるのは、Parisも言うように、実人生、実際の人間の中に思想を追求し、その具体的な模様を描くことによって探求しているからであり、"she not only speculated, she also felt and lived"[26] という創作態度があったからである。G. Eliot と実証主義的観念の結びつきは強く、最後迄その表現から免れることは出来なかったけれども、晩年にはその観念の狭さを超越することによって、時代の一面を象徴するだけに終らず普遍的な力をもつ芸術へと近づくことに彼女は成功している。

注

(1) Shizuko Kawamoto and Koichi Miyazaki, *Shosetsu no Seiki (The Centuries of the English Novel)*, (Tokyo: Kaitakusha, 1964), p. 61.

(2) Masami Tobari, *Doitsu Kyoyoshosetsu no Seiritsu (The Growth of German Bildungsroman)*, (Tokyo: Kobunsha, 1964), p. 4.

(3) Bernard J. Paris, *Experiments in Life* (Detroit: Wayne State University Press, 1965), p. 128.

(4) Henry James, "Daniel Deronda: A Conversation", *George Eliot*: *The Critical Heritage*, ed. David Carrol (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), p. 431.

(5) Henry James, *The Portrait of a Lady* (London: Oxford University Press, 1962), p.49.

(6) George Eliot, *Romola* (London: Everyman's Library, 1968), p. 565.

(7) George Eliot, *Middlemarch* (London: Oxford University Press, 1963), p. 78.

(8) George Eliot, *Daniel Deronda* (London: Everyman's Library, 1969), p 607.

(9) J. Hillis Miller, *The Disappearance of God* (Harvard University Press, 1963), pp. 12-3.

(10) *Daniel Deronda,* p. 221.

(11) *Romola*, p. 53.

(12) *Middlemarch*, p. 2.

(13) *Ibid.*, p. 33.

(14) *Daniel Deronda*, p. 12.

(15) *Romola,* pp. 239-240.

(16) Barbara Hardy, *The Novels of George Eliot* (University of London: The Athlone Press, 1959), p. 47.

(17) *Middlemarch*, p. 37.

(18) *Ibid.*, p. 38.

(19) *Daniel Deronda*, p. 225.

(20) *Ibid.*, p. 219.

(21) *Ibid.*, p. 474.

(22) Virginia Woolf, "George Eliot", *A Century of George Eliot Criticism*, ed. Gordon S. Haight (London: Methuen, 1966), p. 189.

(23) Calvin Bedient, *Architects of the Self* (Berkeley: University of California Press, 1972), p. 38.

(24) *Doitsu Kyoyoshosetsu no Seiritsu,* p. 146.

(25) *Daniel Deronda,* p. 335.

(26) *Experiments in Life*, p. 114.